

ラブ金子ふるさと探訪

(総集編)



ラブ金子ふるさと探訪実行委員会

昔の金子村

西条誌（西条誌は、旧西条藩の学校（沢善堂）の先生をしていて、日野暖太郎和照という人が、藩主の命によって、天保七年から六カ年の年月をかけ、西条領内を調べて歩いて、天保十三年に完成した報告書です。）によると、昔は河内村と呼ばれていたが、武蔵国（現在の東京都・埼玉県のあたり）から当地に移住した金子氏によって、天正時代（一五七三〜一五九二）末期に金子村と改められたようです。村内の在所から、その広さがわかります。滝之宮、政枝、高木、久保田、一宮、西の土居、西口新田、江口、東西およそ三十町（一町約一〇九メートル）、南北およそ二十町、田畑高二千二百石（一石約一八〇リットル）余り、家数四五四軒、人数二千人余り、用水は不足することがありました。

又、金子川は、現在のようにながれ、用水が切れ、度々洪水を起こしてしまいました。

天保時代（一八三〇〜一八四四）、「新居郡、新居郷、下泉川組、金子村」でありましたが、明治二十二年市町村施行によって、「金子村、庄内村、新須賀」の三村が合併して「金子村」となり一行政区となりました。

昔の庄内村

西条誌によれば、天保時代の庄内村は、およそ次

のようでした。新居郡、伊王郷、沢津組、庄内村は、東西およそ十二町、北およそ七町半、田畑千石余り、家数百二十軒、人数五百四十四人で、昔から、田高、人数とも増減の少ない村でした。

用水は、高柳泉、洪水川下流の岡崎川から引いた十分な水がありました。

田土は肥えていましたが、粘りがあって乾きにくいため、雨の多い年は不作となりました。

土地が広く人数が少ないため、もつと人数、戸数をふやせば更により村になると記されています。

村内の在所の小名、高木、石原、城下、坂又、乙井、枝元、河端、年成、弓田、友道、小深、新土居、白木、当免などの他、人の住まわらない小名が数多くありました。

当時の村の名産品は、里芋、ごぼうなどでした。

にいざかい

にいざかい 見はるかす野は
黄金波たわに実る元塚近くも
にいざかい だらだら坂の頂上よ
庄内行くも 久保田へ帰るも

昭和三年ころの「にいざかい」は、だらだら坂の頂上です。庄内の方へも久保田の方へも下りとなっていました。

桜内橋の付近、久保田町の側は、松林が続き、その西側は、古田でした。道は、尻無川ぞいに、「にいざかい」まで北行き「にいざかい」から久保田及び庄内へ通じる道は、幅が約六尺（一尺・三〇センチメ

トール)くらいで、大八車がやつと通れる曲りくねった道でした。周囲は稲穂や麦畑が見わたすかぎり広がっていました。

尻無川は、上流も下流も水の流れているのは、三尺くらい石橋がかかっています。



「にいざかい」は、現在の日本年金機構新居浜年金事務所西側のあたりです。庄内橋のあたりです。参りの時は、金毘羅杯。再会を予期できない時などに「旅に出ました」に「いざかおし」あたりで別れをことす。現在から想像できないことですね。

天神の木相撲とりたぬき

今の新居浜警察署周辺は、大正時代の初めころまでは、一望の田園で蛭が飛び交い、かもがやっで来たし、カツコーやふくろうが鳴いていました。川幅一間(一間約一・八メートル)そこその尻無

川には、めだか・はや・ふな・どじょう・どちんこ・うなぎ・川がになどがいて、子どもたちにとつて川遊びの天国でした。

とところで、今の新居浜警察署の東から、「にいざかい」(現在の白木入口)までの約二七〇メートルの間は、天神の木と呼び、尻無川に沿う大土手があり、

松並木が続き、うっそうとしていました。

ここは、人里離れたさびしい位置にあり、たぬき族が住むには格好の場所でした。

「ここに住む」相撲とりたぬき」の話は、小さい頃からおばあさんやとなりのお年寄りからよく聞かされてきました。

そのうちから、二つのお話をしましょう。

むかしは、お百姓さんには、番水制度があり、自由の水を田に引くことができなかつたのです。そこで、少しでも自分の田にたくさんの水を引こうと、

人目をさげ、夜間に尻無川の水を盗みに出向くのでした。

ころを見計らってたぬきはうまく相撲とり化けて、

「もしもし、ちよつと相撲を一番とろうや。」と、

言いました。いやおうなしに一番とられる。

五体をぶつつけ、けんめいにかかると、松の木に

お百姓さん「を見たことかあります。

河内の六地藏に住む肝玉翁さん、しんせきの法事

からの帰りの夜道、天神の木を通りかかりました。

「たぬき。」「爺さん、相撲一番とろや。」

「何ぬかす。」が、爺さんは、

きも負けてはいたぬ
い。爺さんの後を
つけ、重箱をねら
つて、精進料理を
きれてしまったりと
うってことですか。

尻無遺跡

昭和二十四年一月のことです。
尻無川の改修工割をしていました。
その時、高木（高木は今の町名ではなく昔の小名で
ある。）一四六番地にある、神野正平さんの屋敷の
一角から、弥生時代前期の壺型土器が発掘されまし
た。

遺跡は、むかし尻無川の氾濫によってできた沖積
（流水などのために土砂などが積み重なること）平野
の微高地にあり、新居浜平野における弥生時代の様
子を知る重要な土器です。
新居浜平野で、人の住む所や田畑のある平地は、



沖積世に、国領川や
金子川など、河川が
南の山から土砂を運
んで、堆積してでき
た沖積層といわれて
います。発掘された
尻無川の跡あたりは、
尻無川の運り土砂
で他の場所より少し
高くくなっています。

小きんたぬき

昔庄内の小原の森の中に「小きん」と呼ぶ一匹の
たぬぎが住んでいました。このたぬきは、いたって
ひょうきんもので、いつも花嫁に化けて、嫁入りの
ちようちん行列をするのが得意でした。嫁入りの
菊の花が咲いて、萩の花がかわいい姿を見せてい
ます。

野菊の花の咲きかおるころ、秋の夜はふけて、涼
しい夜風が心地よく、あたりを過ぎていきます。
農家の人々がやっとな夕食をすませたころ、小原の



と、馬になつて、花嫁姿の小さなたぬきを背中に
 乗せ、四つんばいになつて、行列に加わり音井藪に
 着いたのです。みごとな御殿があつて行列は、その中
 へ入つて行くのです。小きんたぬきは、喜平次馬の背中
 から降りて、喜平次さん、ご苦労さまでした。あなた
 は、今夜、馬になつてくれたので、この松の木につな
 いで、おきから、ひひん、ひひんと、馬の鳴く声をし
 てください。そうすれば、お酒でも、ごちそうでも、ほ
 しいものを待って来させますから。」
 と、言つて、御殿の中へ姿を消していきました。
 喜平次は、酒好きでしたから、酒がほしくなると、
 ひひん、ひひんと、やりました。
 そのたびに、ごちそうが運ばれま
 した。喜平次は、こんなことなら何度でも、たぬ
 きの嫁入り、馬になりたいたい、思ふのでした。
 喜平次は、いつまでもひひん、ひひんを
 続けていまやがて、夜が明
 けて、岡崎山の方から太陽のぼり
 はじめました。畑に行くか
 かりました。



どこからともなく、馬の鳴く声が聞こえてくるの
 です。作兵衛さんは、不思議に思い、音井藪の方に
 近寄つてみると、藪の入り口の松の木に、目明かし
 の喜平次さんがつながれて
 「ひひん、ひひん。」
 と、やつてゐるではありませんか。
 作兵衛さんは、
 「これ、これ。目明かしの喜平次さん、どうした
 ことだ。」
 と、強く肩をたたいたとたん、喜平次さんは、目
 が覚めたのです。
 喜平次さんは、夜通し松の木につながれて、
 「ひひん、ひひん。」
 そうして、何を飲まされ、何を食べて喜んでいた
 のでしょう。

民部神社

庄内町に小さな祠のようなお社があります。
 民部神社といひます。
 むかしは、たくさんの方がお参りしていたそうで
 す。由緒深い神社で、「民部さん、民部さん」と、親
 しまれていました。
 現在では、すぐ西側の加藤盛義さんがお守りして
 います。
 祭神は、御代島の城主だった加藤民部守をお祀り
 した神社（お塚さん）だといふことです。

和尚さんは、たまたまなくなり、京都へと急ぎました。仏師の家に着いた和尚さんは、仏師からの話を聞き、ますます驚きました。和尚さんは、手の修理をしないまま本尊さまを持ち帰り、本堂に祀りました。その後、だれ言うことなく、「片手薬師さん」と呼ばれるようになったので、それ以来この薬師さまは、ますます有名になり、手の病気を直してくださるといううわさが立ち、四方八方から参拝者が訪れるようになりました。常福寺は天正の陣の後に、小さな仏堂と庄内の東南の田の中、に常福庵と呼ばれて、むかしのようすを物語っています。



正光寺山遺跡

新居浜駅から少し東の方へ行くと、通りぞいの北側に、小笹としだに包まれた小高い丘が見えてきます。

古墳の丘は、正光寺山は長さ約一〇〇メートルに達する。大正時代の予讃線の鉄道工事の際、昭和二〇年の開工、送電線鉄塔建設の工事、また周囲からの開墾、などにより、現在のようになり、中心とした。新居浜を文化した地域は、古代の文化が、早く開けた土壌で、六、七世紀の豪族の活躍の地である。この地には、それらの豪族の墓が見られる。古墳の墓は、ほとんどが破壊されたり、除去されてしまっている。現在は残っているのは、正光寺山古墳一基だけです。



城下の渡し

水の流れていない今の国領川からは、渡し船が活躍していたことなど想像もできませんが、明治三〇年ころから大正時代の初期ころまで、渡し船が両岸を結んで、人々を運んでいたのです。

鹿森ダムができてからは、水害も減り、第二堤防の役割がなくなり、現在の道路が菊本町より拡張され、今のようになり幅になりました。

おかめ林

旧地名東枝元といわれた、国領川二番堤防内の一角に昭和二十年代まで在った雑木林である。おかめ林の名前の由来は定かではありません。現在は池田、食品(いけちゃん)の前、この林には、一宮神社の一番楠にも負けないほどの大楠があったが、第二次世界大戦の時、油を取るために切り倒され、買上げられました。今はその跡に石川酒店の倉庫が建っています。

この大楠と雑木林に、明治三十二年八月の大水害に別子銅山から流されてきた死者が幾十人もかかりました。その人たちを土地の人々が手厚く弔い、今



の水難碑が建てられました。

南中学校堤の桜

大正十三年頃、庄内の各種団体の手で二、三年ぐらゐの苗木を五十本程植えました。その後、枯れたり大水で流されたりしたので補植しました。現存するのは、南中学校庭北端のプールから南へ約五百メートル、東庄内地区に及ぶ堤防に約五十本です。毎春地域の人手近な花見会場として喜ばれています。

なおこの堤防と平行して河川敷広場に並んだもの約五十本の桜は、その後、市によって植えられたも



れていきます。
 数年前より、地蔵祭が復興し、毎年九月二三日には、盛大なお祭りが開かれています。また、昭和三年ころまで、大きは銀杏の木がありました。ギンナンがよくとれていました。

小深の塞の神様 夜灯さん

むかし、人々が道中の安全を祈るために、村の出入り口の所に道祖神（道路の悪霊を防いで行人を守る神）「塞の神様」をおまつりして、旅の安全・交通の安全をお祈りしたのです。

この「塞の神様」は、村の入り口におられ、悪者や悪病、災難の侵入を防いでくれると、村の人々は考えていました。ですから村の人々は塞の神様を「お塞さん」と呼んで親しみお祀りしてまいりました。特に、この小深の塞の神様は、農作物の害虫、病気などを守り、牛馬の安全などを祈る神様



として、地元のお百姓さんの信頼を集めていきました。なお、そばには夜灯さんがあり、西の白木夜灯さん、東の小深夜灯さんとして祀られていました。昭和五二年に、川に倒されていたのを地元の有志によって、今のよう整理されました。いつまでも大切にしたいものです。

上小深遺跡

国立新居浜工業高等専門学校の南、庄内町二丁目

六番一ノ屋敷あたりの所に「上小深遺跡」という遺跡があり、昭和三〇年に、庄内町久保田の道路工事中に地下から、かめ、塚、須恵器（素焼きの土器）の破片などが多数発掘されました。古墳時代のもので、古くは、道、現在、道路、田、宅地の下に埋没してしまつて、わしこまさんのは、土器



人が発見されたということから、この辺りにも大昔の
どんな生活をしていたのでしょうか。
想像してみると楽しいですね。

お塚さん

庄内地区の屋敷の中や田畑の隅などで、たくさん
のお塚さんを見ることがあります。もともと、
お塚さんは、むかしの人々が道中の安全を祈るため
に、村の出入りに、道祖神「塞の神さま」をお祀
りして、旅行の安全や交通の安全を願って建てたも
のです。庄内地区の屋敷の中や田畑の隅などで見る
ことのできるお塚さんは、ちよつと違って見えるよ
うです。
天正一三年（一五八五）、豊臣秀吉の命を受けた小
早川隆景・毛利輝元（広島県東部）の軍と金子備後守
の軍との合戦が新居浜でありました。金子備後守の
軍は、敗れましたが、その当時の金子備後守の軍勢
の武将の戦死したところに建てられたのがお塚さん
であると言われています。
しかし、戦死した武将の名前などは、書かれてい
ません。

土居の内

中国、四国地方には、「土居」という字や大字が、
たくさんあります。「土居の内」という地名は、意

外と少ないのです。「土居の内」「垣内」「土居の構」
などは、みな同意語です。
「土居構」の遺構には、西条市神戸の久門邸があ
ります。愛媛県文化財の指定を受けて、現存してい
ます。
館の周囲を掘り、掘った土を盛り上げて土塁を築
き敵の攻撃に備えるようにしたのが「土井構」です。
庄内町に残っている
「土居の内」という
地名は、郷山にあつ
た、岡崎城の城主藤
田氏の里館「土居構」
があつたので、「土居
の内」と呼ばれるよ
うになつたのでしよ
う。しかし、残念な
がら遺構は残ってい
ません。
「上蔵の内」「角蔵」
という地名が残って
います。これが、
藤田氏の集納米を貯
蔵していた蔵や武器
倉庫の跡というこ
ろから、こう呼ばれ
るようになったそう
です。



庄内戸長役場跡

明治四年廃藩置県により、新居浜地方は、西条県となり、明治四年十一月には松山県、明治五年二月に石鉄県、そして明治六年二月に愛媛県と改められました。明治四年には区制を実施しましたが、新居浜地区は、二大区となり、三二小区に区分され、庄内村と新須賀村は、第一二小区となりました。

（嘉永七年寅八月一日に建築をした）
 木八〇〇番地の民家が庄内村の戸長役場となり、明治二三年に市となり、明治二三年に町村制度が実施されたので、金子村、庄内村、新須賀村の三村が合併されて、金子村となりました。その結果、庄内村の戸長役場は廃止され、上さんの所有となり、現在住宅となつて、改築されました。なお、嘉永七年の棟札は、今も宗像神社に保存されています。

お社日さん



「社日」というのは、土の神様をお祀りする日のことで、「お社日さん」として親しまれています。春と秋の二回あり、醜聞、春分に最も近い戊（つちのえ）の日を「社日」として、土の神様をお祀りします。春社日には、五穀（穀類のこと。米・麦・粟・豆・黍または稗など諸説ある）の種子を祀って、その豊穰（豊かに実ること）を祈ります。

秋は秋社日といって初穂をお供えして、収穫のお礼をし、収穫を祝います。お社日さんは土の神様で、そのお宿は、田の境石、即ち土地の境界を定める石とされています。ですから、境石は動かすものではないといわれがります。

お社日さんは、春のお祭りがすむと、田の方へ出かけになり、作物を守護し、その成長を見守つてくれます。そして、秋の収穫を見届けるのです。秋の収穫を見届けた後、お宿へ戻つて来られるそうです。農家では、「お地神さん」のお祭りといって、当日は、畑仕事を休んで、おはぎなどを作り、一升ますに米をいれ、お銚子に酒を盛つて、社日宮にお供えをし、神様への感謝の気持ちを捧げたのです。



社日宮は、ローカルな神様で、土地の人々には、「お社日さん」として親しまれていますが、この神様は、大きな社に祀られることはなく、田や畑などに小さな御影石に「社日宮」と、文字が刻まれて、静かにお祀りされています。

金子校区には、現在、久保田町に一か所、庄内町の白木と友道にそれぞれ一か所と田所・一宮町、合計五か所にあります。

- ・久保田町東前嘉永四年之建（一八四五年）
- ・庄内町白木嘉永七年之建（一八四八年）
- ・庄内町友道安政六年之建（一八五五年）
- ・田所町（農協本所北側）明治十五年八月吉日之建（一八八五）

・一宮町一宮神社南参道入る東

なお、庄内町友道の社日宮には、風神宮も同時に祀られています

寛吾爺さん

今から百三十年ほど前の安政のころのお話です。庄内町の梅が森（現在の白木、公民館の東方）に寛吾爺さんが住んでいました。寛吾爺さんは、農業のかたわら、狂歌、和歌、即興句を詠むことで、里の人たちによく知られていました。里の人たちは、寛吾爺さんと呼んでいました。文字に書くこと寡（少ないこと）語（かご）だろうという説もあります。言葉少なく、歌とか即興句で、その趣なり意志を表現したという意味の名前に受けとれます。

さて、この寛吾爺さんは、ことに頓智に優れていました。ある年、正月のもちを作ったところ、四十九という縁起の悪い数で困っているという庄屋さん

の家へ出向きました。

「これはめでたい！」

「七つずつ七福神に供えたら 四十九になろう賀（祝うこと）のもち。」

と、詠んで庄屋さんを喜ばせた、ということですが。ある素封家で正月早々、主人が大事にしていた土瓶を使用人が誤って割ってしまった。

正月で縁起でもないというのでさっそく寛吾爺さんをよんで、歌を詠んでもらいました。

「元日に鈍（にぶくてのろいこと）と貧（まずしいこと）を打ちこわしあとに残るは金のつる（蔓）かな」

自分のかわいい娘を郷村に嫁がせる時、餞別のことばを娘に送りました。

「これ娘よ。庄内（性無い）者と思われるなよ。郷に入れば郷にしたがえ。」

こっけいに聞こえて、娘を思う父親の愛情が胸をうちます。都への旅にできました。山城の関所まで来ました。ところが、通行手形がなくて、はたと困ってしまいました。

そこで、歌を詠みました。

「身は予州、表は讃州、阿州ない者、土州召されよ。」（私は伊予の者、よろしゅうござるか。心は晴れ晴れしとる。悪うない者、通し召されよ。）

と、詠んで通してもらったそうです。

愛媛、香川、徳島、高知をたくみに歌に詠みこなしたところがおもしろいですね。

伊予小松藩の庭の立派な大松が倒れてしまいました。

殿様は、悲しみにくれています。寛吾爺さんが呼ばれました。

寛吾爺さんは、倒れた松を見て、即座に

「大松は倒れても小松は栄える」

と、答えて面目をほどこし、殿様からごほうびをいただいたということです。

恐れ入りの和尚さんもお前さんは、お坊さんの姿をしているが、荒神の思えばたぬきではないか。今夜は、これでやめに出直しておいで。」
 と、言いました。
 荒神森の思えばたぬきも「さすが物知りの和尚さんだ、見破ったか。」
 と笑いながら、明日の晩を約束して、荒神森へ帰っていきましました。
 和尚さんは、使いをだして、近くの和尚さんを七人ばかり集めました。
 人そればかり集めました。荒神森の思えばたぬきと問答をするためでした。
 きいよ、よ、晩が「荒神森の思えばたぬきは、若いお坊さんになつて寺を訪れました。顔のお坊さんが座敷に並んで座ってしまつた。座ってかきつそく問答にかかりました。和尚さんがかぶとをぬぎました。荒神森の思えばたぬ



きは、みんな相手の思っていることを知っているからです。
 物知りで知られた宗像寺の和尚さんは、たぬきに負けては、面目にかかわると、横合いから突然、「八万法字とは、いかにや。」
 と、やりました。
 荒神森の思えばたぬきは、びっくりして、そのとたん尻尾を出して、「和尚さん、まいりました。」
 と、頭を下げ、それから和尚さんの弟子になったという事です。
 荒神森は、今はなくなつてありませんので荒神森の思えばたぬきは、宗像寺の境内に来て、住んでい

宗像神社

推古天皇(五五四〜六二八)の時、越智氏によって創建された神社です。
 市杵島姫命(いちきしまひめのみこと)・多岐都理姫命(たきつひめのみこと)・多岐理姫命(たぎりひめのみこと)の他に十柱の神様をお祭りしています。
 むかしから、新居郡でも指折り数えられるほどの大社として、広く知られていました。神社の参道は六五〇メートルにもおよび、国領川にまで続いているのです。実に、荘厳(尊くおごそかなこと)をきわめていました。現在の参道は、約三〇〇メートルくらいです。から、むかしは、その二倍もあつたことがわかります。
 神社の近くには「宗像屋敷」「ネギノ前」「化粧殿」などの神社に關係のある地名が残されています。

万願寺

万願寺は、一宮神社の別当院として栄えていたが、天正一三年の戦いで、小早川の軍によって焼き払われてしまい、そのまま廃寺となつてしまいました。

万願寺のあった場所は、現在のNTT、簡易裁判所のあたりと、推定されています。山門は、一宮神社の隨身門（楼門）の東、現在の一宮町自治会館の東あたりにあったといわれています。そこから、長い参道が続き、境内の東は、尻無川まであり、面積は、二ヘクタールにもおよぶ大きな寺であったそうです。

上仙さん

新居浜郵便局の前に矢野家の墓所と大きな楠の木があります。



ここに、上仙菩薩の奥城（神霊の鎮まる所。神の宮居。墓）と彫った大きな碑があります。「上仙さん」というのは、どんな人だったのでしようか。

「上仙菩薩」は、幼名を千寿丸と呼び、奈良時代に一宮神社の社家矢野実逸の第二子として生まれました。大きくなつてから、仏に帰依して仏門に入り、寂仙と呼ばれました。石鎚、瓶ヶ森、笹ヶ峰などの霊山を開創したということです。このことは、「日本霊異記」や「文徳実録」という古い書物に記されています。

また、万願寺、正法寺、善正寺、上仙寺などの名高いお寺を建て、地方の文化と産業の発展に力を尽くした高僧でした。

とくに、嵯峨天皇（七八六）八四二にゆかりの深い人であったと文徳実録に詳しく書かれています。

上仙さんの死後、万願寺の聖域近くに墓所が作られ、矢野一族をはじめ、地方の人々に崇敬されていきました。昭和三七年、その遠孫になる矢野小春、文雄の母子が相談して、碑を建てたという事です。

「新居浜市史」の第三章（伝説と物語）の初めにも「上仙さま」のことがくわしく書かれています。調べてみる



とよいでしょう。
町の上仙さんは、遠いむかしの人のことですが、一宮の人たちは「上仙さん、上仙さん。」と、親しみを込めて、今でもこう呼んでいます。観音堂兼老人会館を建て、毎月決まった日に老人たちが集まって楽しんでいきます。

一宮神社

和銅二年八月(七〇九)大三島から大山積神、大雷神、高雷龍神を勧請して、新居郡の一の宮としたのが一宮神社の始まりです。古い歴史のある神社であることがわかります。

その後、当社社家矢野さんの家から高僧、上仙法師が出て、石鎚などの霊峰を開きました。(上仙法師をもう一度思い出してみましょう)上仙法師と親しかった嵯峨天皇の勅願所として、天皇の崇敬もあつく「神号正一位一宮大明神」の勅願(天皇の命令による祈願)を嵯峨天皇が一宮神社に献上しました。この額は、一宮神社の社宝となっています。

社殿は、天正一三年(一五八五)小早川隆景の率いる毛利軍によって焼かれてしまいました。しかし、その後、毛利家に数々の異変が起こったため、これは、神罰だと恐れ、元和六年(一六二〇)に、毛利長門守と松山藩主加藤左馬頭との協同で、社殿を再建しました。そして、長州萩の城下に一宮神社の分社をまつりました。

宝永二年(一七〇五)に、西条藩主松平頼純が本殿を造営し、西条藩の六社に加えられました。境内には、伊予八幡神社、新居神社などが祭られ、

一宮神社の秋祭りは全国的に知られている太鼓台がくり出され、とてもにぎやかです。また、隔年ごとの御輿の「海上渡御」(船御幸)は、愛媛県の特別な神事としても有名です。遠いむかしを物語る樟樹林は、昭和二十六年に、国の天然記念物に指定されました。

小女郎たぬき

むかし、立川の奥の小女郎谷に、一匹のたぬきが住んでいました。

夕方になると、美しい娘に化けるので、人々は、「小女郎たぬき」と呼んでいました。小女郎たぬきは、神通力を持っていたので、一宮神社の神様に見込まれて、眷属(お使い者)として、抱えられるよう

になりました。小女郎たぬきは、壬生川の「喜左衛門たぬき」、屋島の「禿げたぬき」とともに、三兄妹として、伊予



たぬき族の名門で、一番くすに住んでいました。代々、一宮神社の宮司につかえて、かわいがられていた利口なたぬきでした。

ある日、ついでに心から、初穂(その年初めて収穫した穀物や、それに代わって神仏に捧げるもの)の鯛を一匹失敬して食べてしまいました。

とところが、悪いことはできません。このことが宮司にばれてしまいました。

「初穂の鯛を盗むような奴は、一族の資格がない。今日かぎり、一宮の森から追放する。」

とうとう、住みついていたら一番くすから、追い出されてしまいました。

住みなれた一宮の森を去って、あてもなく、さまざま歩くうちに浜辺にきました。

船は、慈眼寺の和尚に化けて、いまこぎ出そうとする船に乗せてもらいました。

荷の鯛を一匹、衣の下にかくして、盗み食いをしていました。

「この生ぐさ坊主。」

と、棒で一撃を受けたとにんに化けの皮がはがれ、あわや水葬礼(水中に死骸を投じて葬ること)になるところをやつとの思いで命が助かりました。

その時、小女郎たぬきは前非を悔いて、「このご恩は、かならず報います。大阪に着いたら、金の茶釜に化けますからこれを売って鯛の身のしろ金にしてください。」

と言いました。

大阪に着くと、金の茶釜に化けて、古道具屋に高く買ってもらいました。

こうして金の茶釜の約束をはたした小女郎たぬきはきれいな娘に化けて、古道具屋を抜け出し、大阪の町を道頓堀、千日前と歩き回り、友だちのいる「し

だの森」を訪ねました。しばらくそこに住んでいましたがその後、許された一宮の森に帰ったという事です。いまでは「諸願成就の守り神様として、信仰を集めています。(国領川を上流に行くと、立川で山あいに入る。そこから、本谷を「小女郎川」と呼ばれています。)

くすの木

樟樹は、暖かい土地の好きな常緑広葉樹で、日本の西南地方の海岸に近い暖地の植物です。また、日本は、樟の特産地としてよく知られています。本一宮神社には、数十本もの巨大な樟樹があり、それはそれは見事なもので、実に壮観なものです。これは樟樹は、いつごろ植えられたものでしょうか？

樹齢は、何年くらいでしょうか？

一宮神社が建立されたのは、千数百年前(七〇九年建立)といえますから、このくらいの年輪を刻んでいるものと、考えられます。その中でも、一番大きな



刻 此のお地藏様の建立は天明四年甲辰八月と台座に
 天明四年（一七八四年）は今から二百年昔であり丁
 度その頃、天明飢餓がありましたので犠牲者の供養
 のため建てられたものと思われます。この「こはま
 地藏」は地域の人々の厚い信仰を集め永い風雪を絶
 えてこられたました。
 多逢勝縁とは多くの
 良縁に会うことが出
 来るという意味であ
 り、大慈悲をもつて
 衆生の苦しみを救い
 悪病の侵入を防ぎ、
 とりわけ幼い子供の
 安泰を守って下さる
 有難い菩薩でありま
 す。この「こはま地
 蔵」に願をかけてと
 「一つだけお願い」
 は叶えて下さるとい
 う古い言い伝えがあ
 ります。皆様もひそ
 かなつつましい願
 をこめてお参り下さ
 い。そして末永くお
 地藏様を大切にお願
 します。

へんろ地藏



いつの頃か、生国も名前もわからないが、一人の
 遍路が金子川の金栄橋付近をねぐらとして住んでい
 ました。
 付近の情け深い人が家に泊めて、家族同様にして
 生活していましたが、三カ月も過ぎても出ていかな
 いので、遍路を追いました。ところが、遍路は
 また橋の付近をねぐらに住むようになり、まもなく
 して死んでしまったのでした。
 その後、その家に不幸が続き、遍路のたたりであ
 ると、地藏様を祀って霊をなぐさめた。
 その家には、その後不幸が訪れることはありません
 でした。
 昭和三十一年頃の、夏の旧盆には、この遍路地藏
 の祭りがにぎやかに行われていましたが、戦後は夏
 祭りも絶えてさびしいかぎりです。
 この地藏様、新四国八十八カ所の六十二番所です。

六地藏のおんぶタヌキ

金子川の久保田の西南端で川西の河内に、人々の
 幸福を祈って六体の地藏が祀られた六地藏（旧地名）
 があり、今は神楽場と呼んでます。
 秋山の爺さんのかつぷくから、地の人は六地藏の、
 西郷さんと呼んでいました。今の久保田黒住教会前
 に大クスの木があり、その下を爺さんが通りかかる
 と、雨が降るように砂がパラパラと落ちて来ました。
 三度も出会うので、「今日こそ許さんぞ、下りて来
 い！」と、どなりつけ小石をなげつけると、それか
 らはいたずらをしなくなつたという事です。
 あるおぼろ月の夜、教会の前を通ると、きれいな
 ベベ（着物）を贈った美人が「もしもし爺さん、わたし

は足が痛うて歩けんので、向かいの土手までおんぶ
 して渡してくれまいか。」と、しきりに頼みます。
 爺さんは「よしよしわけのないことじゃ。」と、女
 を背負ってやりました。ところが、大きなしつぽが
 手にふれた。これ幸いと爺さんはしつぽをしつぽか
 とつかんで「タヌキちゃんよ、わしを誰と思うとる
 のか、今晚こそはだまされんぞ。連れていんでタヌ
 キの正体を見破ってやる、かくごせい！」と、川を
 渡り終わろうとす
 ると、タヌキは「こ
 れから人をだまさ
 んけん、どうぞお
 ろしてく下さい。」
 と、必死に哀願し
 ます。「お前はそう
 言います、人をだ
 ますけん絶対にお
 ろさんぞ、タヌキ
 汁にして食うてや
 るけんかくごせ
 い。」とこっぴどく
 戒めてから助けて
 やりました。
 爺さんの恩を知
 ったか、その後、
 このおんぶタヌキ
 は人を化かさぬよ
 うに化かしたとい
 うことです。

